太陽の予告状

相川ちぇりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
太陽の予告状

【Ｎコード】
Ｎ１１４１Ｆ

【作者名】
相川ちぇりん

【あらすじ】
２０００字程度の短い小説。完全な夜に枕の脇に届けられる向日葵。その配達員の顔を「私」は見るのが怖い。そこには太陽から与えられた贅沢な恐怖が潜んでいる。

太陽の光を内部まで浸透させたようなまぶしい黄色だ。そんな向日葵が日が昇ると同時に枕の脇に置かれていた。私は寝返りを打ち、瞼を閉じたまま片手でその存在を確認する。花びらやその堂々と広がる葉っぱを二本の指でその体温を確認する。生命が通う液体の気配を確認する。少しひんやりとしている。そこにある向日葵が生きた本物であることが分かる。

大丈夫、今日も届いている。

私は大きく鼻から息を丁寧に落とす。意識を安定した海の中に沈める。今日も自分は守られていることを横の向日葵は語りかけてくれる。

その向日葵は深夜に届く。街が息を最もひそめる夜。大体３時や４時ごろだ。その時は既に私は無意識に支配されている。実際には故意的に無意識の支配を許しているのが正しいかもしれない。瞼をしっかり締め、唇を結んでいる。その寝顔の無防備さは眠っていることを記すこと以上の意味はない。そこには強い意志のようなものも感じられる。

私が意図的であってもそうでなくても配達員は決して私の深い眠りを妨げることをない。完全に音を消し、姿も消し、沈黙とすっぽり空いた空間の中でただそこに向日葵を届ける。そこには一瞬の不完全さもない。

私は昔その姿のない配達員のことをよく知っていた。ただ、もう思い出せないのだ。というか、これ以上知る必要性も思い出す必要性も感じられなから思い出さないようにしている。記憶というのは便利なもので、消そうと努力すれば完全ではないが濃い霧によって輪郭を消すことができる。私は瞼をわずかに開いて部屋が太陽の光で

薄暗くなっていることを確認する。太陽の光は厚手の花をあしらったカーテンで遮られているが、一度解放されれば眼を覆いたくなる光があることを想像させる。向日葵の葉と手をつなぐ。毎晩何も言わずに私に花を届ける配達員のことを想像する。

私が配達員を思い出して知ってしまえば自分は毎日送られてくる一輪の向日葵だけでは満足できないだろう。２本、３本と増え、１ヘクタール、１００ヘクタールと貪欲に向日葵を求める自分を容易に想像できる。１本で満足できた今の状態から、どんなに増えても満足できない向日葵畑を求める自分になりたくない。もう、なりたくない。なりたくないけれども、大量の黄色い炎を求めないわけにはいかないのだ。配達員を知ってしまえば、地中の奥深く似終われたはずの欲望の蓋を開くことになる。

今、顔は見えないながらも感謝できる配達員をきっと私は怨むことになる。

その恐怖と共に配達員に会いたいと熱望している自分を認めざるを得ない。もし向日葵が目を覚ました時になかったこと想像すると急激に血液が凝固し、青味を感じる。同時に唇が震え瞳は奥に鈍い刺激を感じ取り涙腺から液体を呼び起こす。液体は目じりから垂直に額をつたる。そこにある微かな温かみに励まされる。あるものは耳のくぼみへ、あるものは黒く染めたはずの茶色が勝った髪を濡らす。薄暗い天井を見上げながら目覚めと共にそこに向日葵があると信じて自分に言い聞かせて眠る毎日を振り返る。向日葵がない日の自分もその一日も想像できない。枕の横にある向日葵は私の頼りなさそうな細い腕のようも身体の一部であり、それがないことは日常生活に苦しむことと同じだ。だからできるだけ想像しないようにしているが、それはある儀式のように、あるいは月が地球の軌道を規則的に回転するように、自然発生的にその悩みは深夜眼を閉じると浮かび上がってくる。

そして毎日同じ質問をする。
そんなに向日葵が自分にとって重要ということは、それを届けてくれる配達員が重要ということとイコールなのだろうか。
何度も自分に問いかけるが、納得いく答えが見つかったためしがない。横にある向日葵が届かなくなっても、また別の配達員が花を届けてくれるのではないか、コスモス、カスミソウ――　私はそれに満足できるのだろうか。私を満たしてくれる向日葵はこの向日葵だけなのだろうか。

ただわかるのは横にある向日葵に向き合った時に配達員の顔が見えるということ。それは幸せではあることには間違いない。けれど、幸せは不幸と同じくらい重い。配達員の顔を見るのは重いのだ。幸せは太陽のようにあらゆる影を隠してくれる。そこに色も何もないただ白い熱い空間が全てを飲み込んでいく。色気のない日常も、無機質な文字も、不完全な音もその絶対性と完全性に飲み込まれる。不完全性は完全に消滅するのだ。
ただ、今の自分はその不完全性を飲み込む白い熱が許せないんだろう。不完全性は可能性だ。可能性を太陽の白い熱に飲み込まれることは恐怖だ。何があっても白で上塗りされてしまう。白に潰される自分は幸せだろうか。それを恐れる自分は贅沢だろうか。白が重いと感じること自体は不健全なのだろうか。太陽の白は生活の完全性と同時に可能性を飲み込んでいく。正直、自分にはそれは恐怖としか思えないのだ。

太陽から白の予告状が私の横にある向日葵なのだろう。向日葵を抱き、配達員の顔を正面から見たとき私を白い熱が包む。

私はこの向日葵をどう扱えばいいのだろうか。
向日葵がある一瞬の幸せから見えるのは逃げ切れない贅沢な恐怖だ

った。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。ここには幸せになることは嬉しいはずなのに、実はそこにはまぎれもない恐怖の存在もあるのだなぁと最近感じました。その恐怖を簡単にですが作品にした次第です。私の主観を紹介したまでで、共感も何ももとめてません。関係性が生まれることが幸せです。ただ本当に読んでいただいた方に心から感謝したいと思います。ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1141f/

太陽の予告状

2010年12月25日07時59分発行